

令和5年度事業報告(音楽)

自 令和5年4月1日

至 令和6年3月31日

公益目的事業3(顕彰事業)

1. 「第54回サントリー音楽賞」「第22回佐治敬三賞」(2022年度)の贈賞

第54回サントリー音楽賞の井上道義氏、第22回佐治敬三賞の「北村朋幹20世紀のピアノ作品(ジョン・ケージと20世紀の邦人ピアノ作品)」への贈賞式を7月11日(火)15:30よりサントリーホール ブルーローズ(東京都港区)にて開催し、賞金700万円(サントリー音楽賞)、200万円(佐治敬三賞)を贈呈。

贈賞式にひきつづき、ANAインターコンチネンタルホテル東京 B1 プロミネンスIにて、祝賀パーティを開催した。

2. 「第55回サントリー音楽賞」(2023年度)の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和6年1月8日(月・祝)に、選考委員7名による第55回「サントリー音楽賞」の第1次「候補者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。
- (2) その結果、2023年にわが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた人々として、候補者を選定した。
- (3) 引き続き2月29日(木)に「受賞者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。
選考委員7名による慎重な審議の結果、第55回サントリー音楽賞に、近藤 譲氏が選定された。
- (4) 3月25日(月)の理事会において、正式に第55回「サントリー音楽賞」は、近藤 譲氏に決定した。

イ. 贈賞理由

近藤譲はちょうど半世紀前の「線の音楽」シリーズ以来、その創作、著作を通じて日本の聴衆、音楽家を深いレベルで啓発し続けてきた。近藤の作品は、声高に激情を叫ぶようなものとは異なり、いつも静かに、しかしくっきりとした輪郭を示すもので、その影響は年月を超えて、今一層光を放つようになっている。

2023年度の「コンポージアム」(5月23-28日、東京オペラシティ)は、近藤の人と作品に焦点をあてたもので、ドキュメンタリー映画の上映とトーク、世界初演2曲を含む管弦楽の演奏会(そこには70年代の作品から最新作までが並んだ)、そして武満徹作曲賞の審査、さらには同時期に開催された作曲のマスタークラスや関連公演も含めてこの作曲家の現在を一望できる機会となった。

一つの音を置き、それを繰り返し聴くことによって次の音を見出し、さらにそれらの音を繰り返

し聴くことによって第三の音を置く、といった近藤が繰り返し述べてきた作曲法は、かつて様々な作曲技法がもてはやされた時代には素朴すぎるように見えたし、その作品自体はかえって謎めいて聞こえたのだが、パンデミックや戦争によって人間（と人間集団）の孤立が深まり、さらにAIによる芸術の侵食が現実のものとなった今、近藤の音楽と言葉は、我々に深い覚醒が必要なことを告げているように思われる。

CD『近藤譲室内楽作品選集「昼と夜」』も含めて、前述のコンポージアムの諸成果を考えると、今年はこの世界的に見ても稀有な、知的で誠実な活動を続けてきた作曲家を顕彰する絶好のチャンスである。ここにサントリー音楽賞を贈るものである。

- ウ. 選考委員 伊東信宏、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、船木篤也、松平あかねの7氏
- エ. 賞金 700万円
- オ. 贈賞 令和6年5月13日（月） サントリーホール ブルーローズ

3. 「第23回佐治敬三賞」の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和4年10月1日～11月30日および令和5年4月1日～5月31日の2回の募集期間に、令和5年1月1日～12月31日（上期、下期）に実施される音楽公演についての応募を受け付けたところ、61企画についての応募があった。応募公演について選考委員9名が分担し公演の視察を行った。
- (2) 令和6年3月9日（土）、第23回選考会を芸術財団会議室にて開催し、選考委員9名による慎重かつ白熱した審議の結果、第23回「佐治敬三賞」受賞公演に、「サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演 安野太郎ゾンビ音楽『大霊廟Ⅳ－音楽崩壊－』」が選定された。
- (3) 3月25日（月）の理事会において、上記公演を正式に第23回「佐治敬三賞」の受賞公演に、「サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演 安野太郎ゾンビ音楽『大霊廟Ⅳ－音楽崩壊－』」が決定した。

イ. 公演概要・贈賞理由

<公演概要>

名称：サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演
安野太郎ゾンビ音楽『大霊廟Ⅳ－音楽崩壊－』

日時：2023年10月14日（土）／2023年10月15日（日）

会場：愛知県芸術劇場 小ホール

出演：「ふいガー」：今井貴子（フルート奏者）、大内孝夫（名古屋芸術大学教授）、
内藤穂乃果（愛知県立芸術大学3年）、安野太郎（作曲家・愛知県立芸術大学准教授）
「パンチャー」：大石愛莉（愛知県立芸術大学4年）、望月郁亜（愛知県立芸術大学3年）

「オルゴール」：中ムラサトコ（ボイスパフォーマー）

「キックボクサー」：大石駿介（キックボクシング元世界チャンピオン）

作曲・作・演出など：安野太郎／演出補・ブレン：小野寺啓／舞台監督：渡部景介

音響：山口剛（合同会社ネクストステージ）／照明：畔上康治（愛知県芸術劇場）／

制作：菅井一輝／プロデューサー：藤井明子（愛知県芸術劇場）

ビジュアルイメージデザイン：武部敬俊／記録：丸尾隆一、西野正将

主催：愛知県芸術劇場／後援：愛知県立芸術大学

<贈賞理由>

安野太郎がこれまで継続してきた「ゾンビ音楽※」は、近年、あらたな形のパフォーマンスに変化している。昨年からは彼がテーマにしているのは、「音大生のキャリア構築」という、ある意味ではきわめて非芸術的な問題。実際に公演に足を運んでみれば、彼はふいごを踏み、キックボクシングで痛めつけられ、仲間とともに行先がよくわからないトークを行なうばかり。その過程で特に鋭い知見が披露されるわけではないし、そもそも「ゾンビ音楽」が鳴り響く瞬間も、以前に比べてかなり少なくなっている。

ある意味では、相当に「退屈」な公演であるということも可能だろう。しかし、小器用に流行を取り入れるのとは正反対に、自らの内奥に湧きあがる疑問に、「ゾンビ音楽」というメディアを借りながら、かたちを与えようとする点において（それは本当に身体的な「運動」でもある）、この公演は容易には真似のできないオリジナリティがある。

もちろん破天荒な公演だけに、選考委員の受け止め方は様々だった。演奏会という枠をダダイズム的なシアターピースによって打破しようとしたという評価もあれば、一昨年の「大霊廟 III—サークル・オブ・ライファー」に比べるとむしろ後退しているのではないかという意見もあり、賛否含めて多くの議論が交わされた。しかし、多様な議論を喚起すること自体が本公演の価値ともいえ、さらには安野太郎の一連の活動について、何らかのかたちで顕彰したいという思いについては全員が一致しており、佐治敬三賞を贈ることが決定した。

※ゾンビ音楽：安野太郎が発明した、リコーダーを演奏する自動演奏機械による音楽。機械の演奏であるため、人間の演奏のように音を合わせようとする意思が無い。ゆえに独特のゆらぎがある音響が生まれる。大霊廟シリーズにおいては、機械が指を動かす装置に加え、人間がふいごを踏んで楽器に空気をおくる装置が備えられるようになった。人間が機械のために奉仕するこの構図に安野は様々なテーマを投影してきた。

ウ. 選考委員 浅井佑太、伊藤制子、岡田暁生、小室敬幸、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、野々村禎彦、水野みか子 の9氏

エ. 賞金 200万円

オ. 贈賞 令和6年5月13日（月） サントリーホール ブルーローズ

4. 第33回「芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考、決定、贈賞

2022年に初演された新進作曲家の管弦楽作品の中で最も清新かつ豊かな将来性を内包する作品を選定。最終選考は「サントリーホール サマーフェスティバル 2023」の一環として、公開の場で行った。

第33回「芥川也寸志サントリー作曲賞」選考演奏会

8月26日（土）15：00～ サマーフェスティバルの一環として開催。

第31回受賞記念委嘱の桑原ゆう氏作品を初演したのち、候補作品を演奏した。

演奏終了後、3人の選考委員が公開による選考を行って、1曲を選定し、第33回「芥川也寸志サントリー作曲賞」（150万円）を向井航氏作曲の『『ダンシング・ティア』オーケストラのための』に決定、贈賞した。

選考委員は、稲森安太己、小鍛冶邦隆、渡辺裕紀子の3氏。選考会司会は白石美雪氏。

なお、受賞作曲家には新作を委嘱（委嘱料100万円）し、完成後当財団主催の演奏会で初演する。

公益目的事業4（助成事業）

1. 佐治敬三賞推薦コンサート活動

佐治敬三賞応募公演の中から、一部を紹介し実際に聴いてもらう機会を提供するために、佐治敬三賞推薦コンサートとして選定、チケットプレゼントを行った。

令和5年度は、第23回佐治敬三賞応募公演のうち令和5年4～12月開催公演および第24回の一部（令和6年1～3月開催分）の推薦された32公演を、ホームページなどで告知し、抽選により各公演10名を招待した。

2. 学生向け楽器貸与

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の育成、クラシック音楽の発展に貢献することを目的に、学生向け楽器貸与を行った。

10年目となる本年度は、みなとみらいホール 小ホール（横浜市）にて実施された「第77回全日本学生音楽コンクール」バイオリン部門（主催：毎日新聞社）の中学校の部（12月3日）、高校の部（12月4日）にて、選定委員が第10回「サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者を選定した。3年間の無償貸与を令和6年1月より開始。

【第10回サントリー芸術財団名器特別賞受賞者および貸与楽器】

立野心瑚 JACOB STAINER（1669年製）バイオリン

大屋 響 TOMASO CARCASSI（1751年製）バイオリン

【選定委員】

梅津時比古（毎日新聞社 特別編集委員）

田中義郎（毎日新聞社 企画・文化事業部長）
石井志都子（音楽家、全日本学生音楽コンクール諮問委員）
辰巳明子（音楽家、桐朋学園大学・桐朋学園大学院大学学長）
藤原浜雄（音楽家、桐朋学園大学・桐朋学園大学院大学特任教授）
福本ともみ（サントリー芸術財団専務理事）

3. 演奏家向け楽器貸与

ア. 貸与楽器および貸与者（継続）

平成 30 年貸与決定者への楽器貸与を継続。貸与期間は 5 年間とし、令和 4 年度末までの予定であったが、延長の希望があったため 1 年間の延長を行った。

- ①ANTONIO STRADIVARI（1727 年製作 バイオリン）－米元 響子
- ②PAOLO ANTONIO TESTORE（1728 年製作 ヴィオラ）－田原 綾子

4. その他の助成

ア. 活動助成

- （1）音楽文献目録委員会 音楽文献目録出版に対して
- （2）ミュージックフロムジャパン 第 49 回ミュージックフロムジャパン開催に対して

イ. 運営助成

- （1）日本作曲家協議会
- （2）日本現代音楽協会
- （3）日本演奏連盟

公益目的事業 5（出版事業）

「日本の作曲 2020-2022」の刊行

50 周年記念出版「日本の作曲 2010-2019」の続編として、これまでの 10 年ごとであった制作を 3 年ごとに変更。3 年間に初演された日本人作曲家作品について 5 名の選者が、1 名につき 15 曲ずつ選評執筆する編集方法で、よりタイムリーで具体的に直近の日本の作曲界の状況を記録した出版物となった。

以 上